

8. 核医学（R I）検査

放射線の検査に使われる薬には、造影剤などのほかに、その薬自体が放射線を放出する放射性医薬品があります。その薬は、体内に入ると（主に注射で）肝臓とか心臓とかの特定の臓器などに集まる性質を持つように作られています。放射線を出している薬ということで、不安に感じるかもしれません

が、身体が受ける放射線の量は少なく、CT検査などで使われる造影剤にくらべると副作用もごく稀です。また、大半の検査が注射をして横になっているだけで済みますので、苦痛もほとんどありません。

この検査は、放射性医薬品を投与し、その臓器などに集まったタイミングをみはからって、専用のガンマーカメラという装置で検出して、その臓器の働きとか病気の有無などをみる検査です。最近では、断層像を得られるほか、コンピューターで画像を処理することにより、臓器の血流量や動きなどの働きについて詳しくみられるようになりました。

核医学検査を受けるときの注意すること

この検査は、放射性医薬品を注射（飲む場合もあります）してから始まりますが、薬の種類によっては検査を始める時間やかかる時間が違います。前もって検査の予約をするときにそれらの説明をよく聞いておいて下さい。

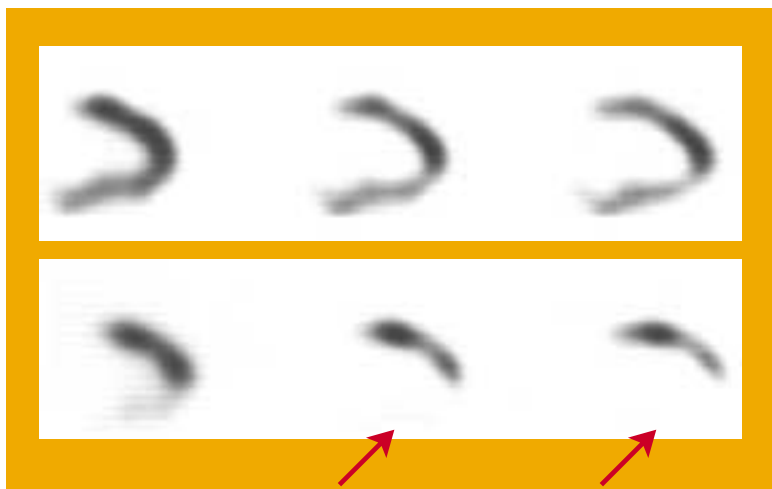


2検出器型ガンマーカメラ装置



骨シンチグラム

運動負荷心筋シンチグラム（狭心症の例）



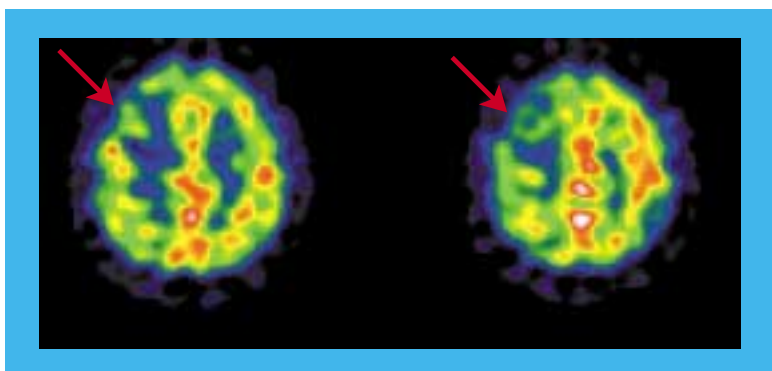
心臓（左心室）の縦断面層像

上の写真は安静にしている時の心筋の様子。

下の写真は自転車をこいで運動をしているときの様子。

心臓の下側の血液の流れが悪く心筋がほとんど写っていません。

脳血流シンチグラム



脳の横断面像

脳の血液の流れる量を調べる検査です。矢印のところの血液の流れが悪くなっているのがわかります。

核医学検査で患者さんが受ける被ばく線量

放射線を出している薬を注射するということで、不安に感じるかもしれませんが、被ばくする量もバリウムを飲む胃の検査やほかのX線検査と変わりありません。

